

釜淵双級巴

五右衛門内の段

三重 別れける。

針に引かるゝ糸筋や、廓を出でて五右衛門が妻と定まる滝川が、素人の業を仕習ふて、洗濯物の縫ひ括り。忙しき中へ五郎市を、連れて戻つて接ぎ合はず、親子の中のそぶくは、絹の表に晒裏、肌付き悪く暮らしめる。

来る人ごとに悪者の、

三上の百助、

片田の小雀、

遠慮もなくずつと入り、

百助「エ、お滝様、縫ひ仕事、御精が出ますの」

滝川「これはく二人連れでようこそ。主は昼寝。なんぞ用なら言ひ置いて」

百助「イヤ、用と言ふて商売尽く。コレ、この小雀が在所、片田の落雁屋に嫁入があつて、しつかりと土産。踊り込む相談に暮方から金蔵所へ寄り合ひます。さてと、雀よ、次手に今のを言はぬか」

小雀「我れ言へ」

百助「ハテ、言ひに来たぢやないか」

小雀「そんなら、余の事でもこんせぬお滝さん、昨日この五郎市殿が使ひに来て、今のかくさんの当たりが懇ろに酷い。詫言してくれて、如才のない言ひ様。十一や二で思ふ様にはあるまいし」

滝川「コレく雀どん、憎うて酷うしませうか」

小雀「サアくそこもあるてや。あんまり可愛いと胴欲が交つて継子憎みになるもの」

滝川「ハテ、異な事の挨拶。継子を憎むが天下の法度

か。こなた衆の所へまで、懺悔を言ふて行く息子、あんまり可愛ゆうござらぬ」

と、一蹴り蹴られて

小雀「道理々々。百よ、聞いてみればおか様のが尤もそうな。継子憎むは世界の大法。とかく息子が腹借らぬが誤り。公事は捌けた、来い、去の」
と、差別知らずが燃える火に、焚き付けかうて立ち帰る。

・辛き親をば親にして、猶も機嫌を取る端香、愛想憎んで五郎市は、しとやかに立ち出で、

五郎「申しかゝさん、お氣が付きやうと思ひ、茶を入れました。出端一つ」

と差し出だす、

滝川「早や小雀が言ひしを根に持ち、なんぢや、茶を入れた。そりや誰が頼んで、そなたが飲んだ飲み余り、口塞げに持つて来たか」

五郎「アノ勿体ない、なんの飲み余りでござりませよ。

初穂を汲んで参りました」

滝川「ム、初穂を飲ましてこの母を追ひ出すのか。飲めなら飲まう、ドレ起こしや」

と、もぎ取る拍子に

情けなや、仕立てし布子にざんぷりと、掛かりや繋がる親子とて、合ひ見る茶とぞ成りにける。

・我が誤りも子に塗する、継母性根を頭はして、

滝川「ヤイ、こゝな粗相者。代りのない晴着、ようこの様にしたなあ」

と、取つて引き寄せ太股を、指先強く二つ三つ、四つ目の紋の掴染、

五郎「ノウ悲しや」

と五郎市は、逃げ廻り手を合はせ、

五郎「誤りました。今度から嗜みませう、堪忍」

と、詫びる目元もおろく涙、

滝川「また泣くか、吠えるか」
と、声端なき折からに。

・人の女房の上水を、飲み廻る小鮎の源五郎、門口より差し覗き、

源五「ハテ、こりやまた親子喧嘩でえすか。性懲りもない息子殿、笑止な和郎」

と座を占めて、

源五「コレお滝さん、継子の世話を焼かずとも、わしが言ふ様にならんせぬかいの。人にばつかり思はせて、気強いお人」と当て擦る。

薄川「また小鮎殿のぢやらくくと、そんな機嫌ぢやないぞや。あつたら口にお風く」

源五「サア、その風に実が入つて、傍へ寄ると震ひ付く。機嫌直しにちよつとこゝを」

と手を取つて、無理に引つ込む

太股ふつり、

源五「アイタ、アイタ、こりや継子殿の相伴した。さても手ひどい御馳走」

と、顔をしかめて摩りある。

薄川「オ、よい気味の。傍に告人のあるも構はず、好んで痛い目なさるゝ」

と、上手にかしを、

『こりやなる』と思ふて何がな追従に、憎む継子を取つて引つ立て、

源五「告手とはこの和郎か。めかりのないちよつぼり殿、奥へ往て貰はう」

と、酷いを馳走に蹴飛ばせば、

五郎市むつと目に角を、立て甲斐もなき親の前、詮方涙押し隠し、泣くく奥に入りける。

源五「サア、見る人もなし、聞手もなし。主のあるあなたに言ひ掛けるから命尽く。首を先へ投げ出そか、胴から下を受け取る気か。はづみ切つたお返事を」と、しなだれ掛かるを

そつと外し、

薄川「夫五右衛門、幸い宿にゐらるゝ。その通り申し聞かせ、急度お返事いたしません」

と、立ち上がれば、

源五「ア、これく、それ言ふてたまるものか。よいく、そうあるからはこつちも意地尽く、破れかぶれ。御大切に思し召しお連合のあくぞもくぞ。言ふ所へ往て申すぢやまで、お暇申す」

と強請り掛け、立つを

お滝は引き留め、

薄川「そりやこなたも同じ仲間」

源五「サア、その仲間が言ふからは慥かな証拠。首投げ出してと申すはこゝ。惚れ掛かるとぞつこん、火へはまるも構はぬ気。なんと一度か二度の事。『オツ』と言ふ気はごんせぬか」

薄川「そんなら一度で大事ないか」

源五「イヤモ、半分でも忝い。幸い傍に人はなし。

表を鎖してついで」

と抱き付くを

薄川「オ、気疎。それく親仁の足音。アイく、呼ばんす、もうそこへ。そりやこゝへ出てくるは」

と、脅せば

うろく狼狽えるを

無理に押し遣り押し出して、

薄川「晩に、晩に」

と一寸遁れ、

二寸延びたる鼻毛の小鮎、内儀の泥に酔はされて、後を

も見ずして逃げ帰る。

・五郎市様子聞きながら、聞かぬ振りにて奥より出で、

五郎「申しかゝさん、とゝさんのお目が覚め、夕飯上がると仰る。わし据えましょか」

と問ふも怖々、

薄川「オ、そりやおれがしませう。その代りには縫ひ仕事取り置いて後掃いて、日暮れに成つたら火を灯し、門も閉め庭も掃き、遣ひ水から風呂の水、言ひ付けずと汲んでおきや。子供遣ふもア、世話」

と、オクリ言ひつゝ奥へ入る影を、

打ち詠めく、恨み涙に暮れけるが。

五郎「思ひ廻せば我が身程、親に縁なき者あらじ。本のかゝさんある時は、とゝさんに気兼ねする。今またとゝさん本のなら、かゝさんが隔たりて、よき事しても気に入らず。外町より来る者まで見侮つて足に掛け、蹴たり踏んだり何事ぞ。この家にかかく暮らすなら、まだこの上にどの様な恐ろしい目に合ふも知れず。いづくへなりとも逃げ行かん」

と、表を差して駆け出でしが、

五郎「本のかゝさんの所は覚えず。どこをしやうど」

と立ち戻り、また駆け出しては行く先の、当てのないのに引かされて、往ては戻り戻りては巷に迷ふ幼子の、途方に暮れてゐたりける。

・五右衛門は『寄合の時分ならん』と立ち出でて、

五右「五郎市よ、何してそこに」

と咎められ、

五郎「イヤ、どつこへも行きやしませぬ。お前はど」

へ」

と問ひ返す、

五右「オ、おれは寄合に。隙は入るまい、つい戻ろ」

と、言ひ捨てゝ行く

袂に縋り、

五郎「もう今夜はどつこも往かずと内にゐて下され。

さなくばわしも連れて往て」

と、おろくく涙の

体を見て、思はずも打ち萎れ、

五右「なぜそう言ふぞ、仲間事、往かぬと何かと後の邪魔。ちつとの間ぢや、留守しや」

と、すかせど

猶もしくくと、涙に声もおど震ひ。

五郎「どゝさん、わしは本のかゝさんに逢ひたい。去なして下され、去にたい」

と、泣き萎るれば

五右衛門も、胸は張り裂く思ひにて、暫し涙にくれけるが。

五右「ホオ、道理ぢや、そうあらう。常から女房めが仕方、いかにおのが子でないとして、朝から晩まで責め遣ひ。ちつとの事も大仰に、またしても打ち打

擲。酷い奴、憎い奴、もう引つ捕へ言はうかと、思

へど胸を擦つてゐる。不甲斐ないと思はうがこゝをよ

う聞け。とゝはな、悪い商売してゐる。今止めとう思

へども、仲間事故止めさせぬ。それをあのかゝめがよ

う知つて、睨見ての我儘気儘。今追ひ出したらやら

腹立て、どんな事を抜かそうやら。ことに彼めが親は

知らで五右衛門、『寄合の時分遅し』と出でて行く。

是非も涙に門を閉め、内の灯火庭廻り。言ひ付けられ
たあらましを、片付け廻る折からに。

・お滝が親のならず者、三二五郎兵衛白似せの、指先動く
髭親仁、門の戸叩いて、

三三「お滝、お滝」

と呼ぶ声す、

五郎市『さては最前の小鮒が来た』と心得て、わざとそ
の場を知らぬ振り、聞かぬ振りして奥に入る。

・猶も忙しく叩くにぞ、

お滝も心ならねども、

三三「誰ぢや、誰ぢや」

と咎め出で、

三三「おれぢや、開けい」

は親の声、

『また用無心か、気の毒』と、思へど是非なく内へ入
れ、

三三「日も暮れたにうとくと、何しにお出で」

と懇ろな、異見ながらの言ひ聞かせ、
それが小耳に止まることも、

と尋ねれば、

三二「何しにとは、娘の所へ親の来るが不思議か。あた
面倒な」

と膝打ちまくり、

三三「言ふまいと思へど言はぬが損。聞きうちちや、聞
けお滝。この中借つた二十両、夕べ五みたでころり
と仕舞ひ、後を繋ぐ種が切れた。五右衛門は宿にか。
マア十両か二十両、借る気で来た、言ふてくれ。近年
見たがはやり出て、ヤモ胴も合はぬぞい」

と話せば、

滝「ア、もうその話聞きとむない。小判の成る木もあ
る様に、またしても無心。主の手前へわしも気の毒、
ことに今夜は留守。マア去んで下さんせ」

三三「イヤ、去ぬまい。我れこそそう言へ五右衛門は、
金の成る木があるげな。毎晩々々うまい商売、元手要
らずの掴み取り、ようごろが来ぬなあ。今夜も働きの
留守ならば、戻るまで待たう。娘、けんく言ふなや
い。へんなんにも知つてゐるぞい」

と、底気味悪き一言に、

くはつと胸まで急ぎ上し、

滝「コレ親仁さん、人の事でも大事小事、あぢやらに
も言はぬもの、言ふてよければお前もの、京の島原で
置土の九郎次を殺し、難儀に及ぶを五右衛門殿の、思
案一つで事の仕舞ひ、親子共に恙のう、今日まで
暮らすは誰が蔭。その恩を知つてなら、苦口言はんす
筈はない。金借る度にいたかはなせ。そう胴欲には言
はぬもの」

と、恨み嘆けば、

三三「喧しい。そりやあつて過ぎた事。今でも金を貸
せばよし。嫌と言ふとこの村の庄屋へ往て、夜の商売
言ふて来る。それとも五右衛門が心底次第。戻るまで
べんくくと、かうしてもゐられまい。寝所せい、寝
てみよう」

滝「そんならどうでも逢ふ気かえ」

三三「逢はずといつそ、庄屋殿へ往こか」

滝「サアそれは」

三三「なんと」

滝「ハテ、寝て待つ気ならこの一間。寝所して上げ
ましよ」

と、暗いを防ぐ明り障子、引き開ければ、

三三「オ、よい合点、我れも五つからおれが手塩、いつ
孝行な事もない。来てちと腰揉め足擦れ。嫌と言ふと
庄屋殿」

と、脅し立てられ

是非なくも、

滝「ハテ、撫で擦りで済む事なら、致しませう」
と伴ふて、入るも疵持つ足の裏、ラクリ、笹原ならぬ藪垣
の。

・隔つる思ひに五郎市は、小鮎と心得奥の間の、親の差添
そことと、尋ね廻れど知れざれば、勝手の戸棚を心差
し、探し当たりし修羅の一腰、そつと抜き取り小脇に搔
い込み、

五郎「おのれ最前蹴た意趣と、父の目を抜く不義者め。
たゞ置かうか」

と、底気味悪き一言に、

くはつと胸まで急ぎ上し、

滝「コレ親仁さん、人の事でも大事小事、あぢやらに
も言はぬもの、言ふてよければお前もの、京の島原で
置土の九郎次を殺し、難儀に及ぶを五右衛門殿の、思
案一つで事の仕舞ひ、親子共に恙のう、今日まで
暮らすは誰が蔭。その恩を知つてなら、苦口言はんす
筈はない。金借る度にいたかはなせ。そう胴欲には言
はぬもの」

と、恨み嘆けば、

三三「喧しい。そりやあつて過ぎた事。今でも金を貸
せばよし。嫌と言ふとこの村の庄屋へ往て、夜の商売
言ふて来る。それとも五右衛門が心底次第。戻るまで
べんくくと、かうしてもゐられまい。寝所せい、寝
てみよう」

滝「そんならどうでも逢ふ気かえ」

三三「逢はずといつそ、庄屋殿へ往こか」

滝「サアそれは」

と忍び寄り、伺ひ聞けば

お滝が声、

滝「申し、お前とわしとは因果な縁、嫌と言ふても
切られぬ。今にも夫が戻られては、意地尽くでどうな
らうも知れず。わしが可愛と思ふてなら、マア去んで
下さんせ」

五郎「イヤ、去なぬ。小言言ふと五右衛門を逆磔に
掛けさす。殺そと生かそとおれ次第」

と、広言吐くは憎さも憎し、

五郎『去ぬる所を殺そうか、寝てゐる所を突かうか』
と、脇差抜いて子心に、取つゝ置いつの一思案。
・かく共知らず五右衛門は、『さぞ待ち兼ねん』ととつか
はと、帰る表の足音を、

『人こそ来たれ』と五郎市は、心急く儘障子越し、ぐつ
と突いたは

お滝が胴腹、『ワツ』と魂切る
声に驚き、

三三「ヤレ人殺し」

と三二五郎兵衛、奥を差して逃げ入れれば、
五右衛門門の戸蹴破つて、見れば女房朱に染み。

五郎市は『人違へ』と、うろ付くを

取つて引き寄せ、

五右「ヤイ倅、恨みあるは、理ながら、母と名が付きや
親殺し。弁え知らぬか戯け者」

と、呵り付くれれば

声震ひ、

五郎「かゝそんを小鮎めが女房に仕をる故、小鮎を殺す
と思ふたら、かゝさんでござつた。堪へて下され、怪
我であつた」

と、あどなき詞も

聞き咎め、

五右「なんと言ふ、かゝと小鮎が不義したとや。そのま
た相手は」

五郎「奥へ逃げて往きました」

五右「さては」

と目掛け駆け行くを、

五郎「ノウこれ待つて」

と手負ひは呼び止め、

五郎「その逃げたのはわしが親、三二五郎兵衛殿。あの
子がそれと知らぬも尤も。今日昼に小鮎が無体の恋
慕。嫌と言へば身を捨て、訴人に出ると阿呆の一徹。
もしやと思ひ宥めて帰し、今宵忍んで来る約束。思ひ
も寄らず親仁殿が見えまして、また金の無心。お帰り
まで待つとて、一間にわしと差し向ひ。小鮎と思ひ違
へたはあるまい事ではなけれども、親と名の付く自ら
を殺してあの子の身の科が、なんとあらうとそれが悲
しい。やつぱり不義で見付けられ、自害と沙汰して下
され」

と、思ひ過ぎする

心を疑ひ、

五右「ヤア白々しい。左程、勞る五郎市を、これまで酷
く責め遣ひ、今更悲しい不憫などは、追従らしい、
措けく」

と、つゞけり言ひ出す

詞の内、苦しき体押し直り、

五郎「コレ五右衛門殿、今死ぬる身がなんの追従。こな
たはまた五郎市に何仕似せの何商ひ、何さす胸で連れ
て戻つた。女房にさへ暇の状。まさかの時は他人向
きと常からの言ひ聞かせ。男の子は夫に付き、どう言
ひ抜けても遁れぬぞや。たとへ別義ないとても、鬼で
もならぬ恐ろしい商売。こなたはそれを譲る気か。可
哀想に美しう生れ付いたあの顔を、撞木の上に晒そう
かと、それが悲しさいとときに、追ひ出す種の無
得心。『早うこの家を逃げよかし、母御の方へ去ねか
し』と、打擲するもこなたこそ、一生その身で果つ
るとも、せめてあの子は人にしたさに」

と、『ワツ』と泣き入る真実を、

聞いて五郎市、泣き出だし、

五郎「かゝさん堪へて下さりませ。なんにも知らないで恨
みました、ひよんな事して切りました」

と、悔やみ嘆け

五右衛門も、至極の涙に嘔びながら、

五右「一寸の虫にさへ五分の魂あるといへば、まして我
れとても倅を連れて帰りしより、たとへ仕付けぬ荷
歩行持ち。人の籠を廻つても、ふつゝり止めうと善
心に、基づく甲斐も情けなや。同類数多からまさ
れ、止めうと言ふても止めさせず。征に掛かるこの
体、追つ付け刀の錆屑と、成る身をせめてそなたとの
う、変つて死んだら果報ぢやに、科なきそちは先へ立
ち、罪ある我れは引き残り、責め苛まれ死ぬるであ
ろ。畳の上での臨終は、羨ましい」

と掻き口説き、男泣きにぞ泣き居たる。

・今際になつて五郎市を、引き寄せて打ち詠め、

五郎「いとしやこれまで気の苦労、怪我でないとして殺す
をば、無理とはさらに思はぬぞや。その代りには仏壇
に香花切らして下さるな。四十九日は家の内に、迷ひ
あるとの事なれば、直に手向けを受けませう。名残り
惜しい我が夫、苦しいはいの」

と言ふ声も、無常の嵐一吹きに、吹き散らされて敢なく
も、この世の縁は切れにけり。

五郎「ノウこれかゝさんく」

と、縫る我が子の嘆きより、堪へ兼ねたる五右衛門が、身を震はしてしやくり泣き、取り乱したる折からに。

・一間の内より三三五郎兵衛、始終を見届け飛んで出で、

三「ヤア、遁れぬところ五右衛門、餓鬼めは則ち親殺し。この旨、上へ言上」

と、言ひ捨て既に駆け出すを、

『南無三宝』と飛び掛かり、なんの苦もなく引つ掴み、有無を言はず氷の刃、ぐつと突き込み一抉り、抉る間に

向かうへ提灯、

『人こそ来たれ』と死骸を投げ捨て、やがて我が子を引つ立て、

五右「これからが身の大事。そちも親を殺すれば、我れも舅の命を取る。二人共に親殺し。この場にゐられず、サア来い」

と、肩に引つ掛け出るところに。

『約束時分』と小鮎の源五郎、『ノウく』と小提灯、明りにそれと見るより五右衛門、『こいつ故』と飛び掛かり、踊り上つて真二つ、直ぐに立ち退く八声の鶏、こつか高野を当てにして、飛ぶが如くに、出でて行く

(2026. 5. 28)